

研究会報告



第17回 東京医科大学脈管研究会

日時: 平成16年3月2日(火)
時間: 午後5時20分～
場所: 東京医科大学病院 教育棟5階 講堂
当番教室: 臨床検査医学講座

1. 腹部限局型大動脈解離症例の検討

(外科学第二講座) 佐藤 和弘、内山 裕智、飯田 泰功
佐伯 直純、渡部 芳子、市橋 弘章
小泉 信達、小櫃由樹生、石丸 新

腹部限局型大動脈解離はまれな解離形態であり、特殊型として報告されている。今回、当院で経験した症例に検討を加え、報告する。対象は当院で入院管理を要した12例。年齢は平均70.3歳、男性10例、女性2例であり、Marfan症候群を1例に認めた。最大瘤径は平均43mm、手術を行ったのは9例で、ステントグラフト内挿術が5例、人工血管置換が4例であった。病理学的検討が可能であった4例中、Marfan症候群の1例は嚢胞状中膜壊死を呈していたが、動脈硬化性変化の強かった3例ではいわゆるPenetrating Atherosclerotic Ulcer (PAU) が発症原因と考えられた。腹部限局性大動脈解離症例では、その原因として高率にPAUが関与していると思われる。

2. 腹腔動脈領域に生じる仮性動脈瘤へのEMS留置の有用性

(外科学第三講座) 池田 隆久、土田 明彦、井上敬一郎
遠藤 光史、北村 慶一、齊藤 準
小澤 隆、青木 達哉

四肢や腎動脈の狭窄性病変へのEMS (Expandable Metallic Stent) 留置は行われているが、腹腔動脈領域の仮性動脈瘤に対するEMS留置の報告は稀で、適応について一致した見解は得られていない。辺縁動脈の出血には緊急処置としてTAEが適応となるが、多臓器を栄養する腹腔動脈領域に生じた仮性

動脈瘤に対し、血流保持および止血目的のEMS留置が緊急時に施行できるかを検討した。症例は臍頭十二指腸切除術後2例、肝動注りザーバー術後2例、固有肝動脈1例、脾動脈1例、計6例に対しEMS留置を行った。

全例で止血を得たが留置後動脈が安定して開存していたのは3例であった。

腹腔動脈領域の出血に対するステント留置の可能性を検討する。

3. 左門脈の紹介—副門脈として直接肝臓に進入する左胃静脈の異常走行例—

(解剖学第一講座) 宮木 孝昌、伊藤 正裕

左門脈という名称は解剖学的に呼ぶ門脈左枝のことではなく、副門脈として直接肝臓に進入する重複門脈の1つである。胃の血管(静脈)のうち、小弯には左胃静脈と右胃静脈とが分布している。通常、左胃静脈は噴門部から胃脾間膜を通過して脾静脈あるいは門脈に吻合するが、左胃静脈が噴門部から肝胃間膜に入り広義の肝門から肝臓に進入することがある。この静脈は左門脈と定義されて、その左門脈の形態と意義について紹介する。

参考文献

- 1) 宮木孝昌: 特集IVRと解剖、3. 左門脈の解剖。Jpn J Intervent Radiol 18(3): 16-22, 2003
- 2) 宮木孝昌、坂井建雄: 左門脈の形態と意義。解剖学雑誌76(3): 281-291, 2001
- 3) Miyaki T, Yamada M, Kumaki K: Aberrant course of the left gastric vein in the human, Possibility of a persistent left portal vein. Acta Anat (Basel) 130: 275-279, 1987
- 4) Miyaki T: The afferent venous vessels to the liver and the intrahepatic portal distribution in the fowl. Zbl Vet Med [C] Anat Histol Embryol 7: 129-139, 1978

4. 未熟児動脈管開存症に対するインドメサシンとデキサメサゾンの併用効果—動物実験と臨床応用—

(小児科学教室) 高見 剛、佐藤 智、五百井寛明
斉藤 哲也、武井 章人、河島 尚志
宮島 祐、星加 明德
(東京女子医大循環器小児科) 門間 和夫

未熟児動脈管開存症(PDA)の薬物療法としてインドメサシン(IND)が広く用いられているが、無効例もしばしば経験する。我々はより有効な内科的治療法を見出すことを目的として、INDとデキサメサゾン(DXA)の併用投与の有効性について検討を行った。

IND、DXA単剤、およびIND、DXAを2剤併用したものを妊娠19日と21日(満期)の親ラットに投与し、胎子を全身急速凍結法にて固定後、顕微鏡下に主肺動脈と動脈管の内径